

楊逸の『ワンちゃん』を読む ——孤独を拾い上げて、「ワンちゃん」に向かう——

陳 晨

1. はじめに

『ワンちゃん』は中国人作家・楊逸のデビュー作品であり、『文學界』2007年12月号に掲載されて、芥川賞候補作となった。本論に入る前に、小説の梗概をまとめておく。小説『ワンちゃん』の主人公には三つの名前がある。「よく働く」を意味する本名の王愛勤、日本名の木村紅、日本でのあだ名のワンちゃん。1960年代生まれで中国の政治と経済の激変期を体験して中年を迎えつつあるワンちゃん。女癖が悪く働かない中国人の元夫に愛想を尽かし、「すべてを変えたい」と心機一転、日本人と見合い結婚をしてはるばる四国の田舎へやってくる。元夫と対照的で無口で大人しい日本人旦那の送り迎え、姑の看病や義理の弟の世話と働きながら、国際見合い結婚の斡旋業に関わりはじめ、四国の田舎の独身中高年男性を中国へ「お見合いツアー」に誘う。見合い先の中国の田舎で、見合いパーティーを開き、通訳として活動する。そこでワンちゃんに見えてきたのは、嫁候補となる中国人女性たちの追い詰められている環境であり、彼女たちをうまく結婚させて、いまの状況から脱出させたいと強く願う。そこで知り合った日本人男性の一人、土村さんにやがて淡い恋心を抱くようになる。お見合いツアーに参加した男女から、成婚のカップルが次々と生まれる。土村さんも無事結婚を成し遂げる。日常に戻ってくるワンちゃんを待っているのは、相変わらず無気力な夫、義理の弟、そして危篤に陥る姑。物語は姑の他界とともに閉じられる。

この小説は日本語を母語としない中国人作家によって書かれたものであり、日本文学の形式に対するある種の批評性を有するテキストである。これまでの『ワンちゃん』をめぐる文芸選評および先行論考をまとめてみた結果、二種類の動向が見られた。一つは、日本語の表現の稚拙さゆえに日本文学でないと否定する（例：村上龍、石原慎太郎選評）¹、あるいは逆にクレオール的なもので、日本語に刺激を与えてくれる歓迎すべき現象と受け入れ、「越境文学」と肯定する（例：沼野充義、谷口幸代論）²というように、日本語表現や日本語文学の文脈で語られるものである。もう一つの傾向は、「ワンちゃん」の心情に寄り添う形として展開されてきた。

1 「第105回文學界新人賞発表・選評批評」『文學界』12月号、2007年、27～36頁。

2 沼野充義「新しい世界文学の場所へ——大きな楊文学についての小さな論」『文學界』9月号、2008年。谷口幸代「楊逸の文学におけるハイブリッド性」『世界の日本研究』国際日本文化研究センター、2011年。

例えばプロレタリア文学の視点から、「ワンちゃん」の「よく働く」というモチーフを、「複雑な人間関係と多様かつ過酷な労働と国境を越える生き方の強度」³として展開した、田村景子の論説がある。また、「ワンちゃん」を取り巻く国際見合い結婚という厳しい現実と照らし合わせて、ワンちゃんのような外国人妻たちの「痛み」と「生きづらさ」の有り様と原因を分析した齊金英の論説⁴がある。

以上にあげた先行論考から、『ワンちゃん』を読むにあたっては二つの読みの手掛かりが用意されているということが分かる。一つは、「越境文学・日本語文学」として読むことである。日本人の読者にとって、馴染みのない中国語的な表現が混じっているこの小説が、読みにくいものとなっていることは明らかである。この種の議論は、その「読みにくさ」をめぐって、賛否両論でありながらもいずれも書き手による文章の技巧や表現の土俵に踏みとどまっている。沼野らが強調しているように、「読みにくさ」はあえて選ばれた「強み」として捉えられるという見方は妥当であると考えられるのだが、それは単に文章の技巧や表現だけで解決されるものではない。もう一つは、『ワンちゃん』に描かれる物語を、現実社会の出来事として読むことである。それは、日本国内における過疎の農村や、農業県の「嫁不足」を解消するための行政介入の一つ、「国際見合い結婚政策」の推進と実施である。国際見合い結婚の中身について、山崎ひろみは次のように述べている。

「農村の嫁不足解消のために、国際結婚を進めよう」という声が、日増しに高まっている。「嫁不足」という言葉の前には、保守も革新もない。その「嫁不足」対策の、最後の切り札として、フィリピン、タイ、スリランカ、韓国、中国などアジア各国の女性との「国際結婚」が考えられているのだ。……けれど、わたしには、どうしても黙って見ていることはできない。この動きは、結婚した本人たちや、この結婚に直接携わっている人々の思惑をはるかに超えた何かに操られているのではないだろうか。わたしには、日本では食べていけなかった農民たちが「開拓」の美名のもとに村ぐるみで満州侵略に出かけた歴史と、いまの、「国際結婚」の動きが、オーバー・ラップされて見える。⁵

『ワンちゃん』には、こうした形の「国際見合い結婚」が物語の主要なモチーフとして描かれている。そのために、「ワンちゃん」という人物に同情を寄せながら、ヒロインの「強さ」あるいは「生きづらさ」を主張する類の先行論はどれもこの厳しい現実に着目してきたのである。だが、注意深く読まなければならないのは、この小説では、山崎らが論じているような「国際見合い結婚」の醜悪な一面や、そこに巻き込まれる外国人女性たちの悲惨さが主旋律として展開されているわけではないということだ。したがって、『ワンちゃん』を、単に「越境

3 田村景子「働く生への応援歌——楊逸の「ワンちゃん」をめぐって」『社会文学』6月号、2010年、173、177頁。

4 齊金英「楊逸「ワンちゃん」の〈逃避行〉——越境願望から痛みへの共感へ」『国文』116号、お茶の水大学国語国文学会、2011年、38頁。

5 山崎ひろみ「〈国際結婚〉は嫁不足を解消しない」『アジアから来た出稼ぎ労働者たち』1988年、258頁。

文学」としてのみ議論することはできず、一方で、嫁不足を解消するための「国際見合い結婚」という現実にも直ちに還元することもできない。言い換えれば、『ワンちゃん』は、この小説を読解するにあたって用意されている二つの手掛かりのいずれに対しても、それぞれの枠をはみだす描写と解釈の可能性を有する作品であると考えられる。

2. もう一つの「ワンちゃん」像

『ワンちゃん』をめぐって、「越境文学・日本語文学」の文脈に加勢せず、「ワンちゃん」への同情や共感を示すような議論に対しても批評的な解釈を試みた先行研究がある。

しかしながら、本論で問題としたいのは、日本語の巧拙のことではない。選評における、小川洋子、高樹のぶ子、川上弘美、山田詠美に共通し、さらには数少ないこの作品に肯定的な男性評者たちに見られる、この作品に対する「読者」としての問題である。(中略) この小説が日本語を母語としない作家によって書かれた「日本語小説」であること、そして二国間の経済格差から生じる諸問題と女性、そして日本語小説と何重にも重なる政治性を意識するがゆえに、逆説的にその差別構造を補完してしまった結果であるとも言える。そして、そうした小説外部の周辺事情への拘泥は、この小説を「読む」ことからしか生じ得ない様々な可能性を、結果的にどこか遠い場所に置き去ってしまっているのでは無いかわられるのである。⁶

「ワンちゃん」の心情に寄り添おうとする読み方には、同情と賛美の視線が常に絡んでおり、そのことによって、物語の単純化・パターン化が生じるおそれがあるという正田雅昭の指摘である。正田の論考は、我々にもう一つの「ワンちゃん」像を提示している。

ワンちゃんの視線は、限りなく顧客である日本人の田舎の男性に近い位置にある。「田舎の男には、田舎に行って相手を見つけてあげれば良いのだ」という考え方は、まさに女性を商品としか考えない視線である。物語には、しばしば中国の田舎の女性たちの境遇に同情しているワンちゃんの心情が描かれるため、こうしたビジネスライクな側面があることが読み落とされがちであることを、ひとまず指摘しておかねばならないだろう。(中略) 「逃走」の舞台は、日本に移る。(中略) こう決意して、日本に「逃走」してきた「ワンちゃん」であったが、自己の「逃走」を客観的に相対化し得る術を持たない「ワンちゃん」は、そもそも今回の日本への逃走に関しても、国籍こそ違えど「男」を使って逃走したことは同じであるという事実には気がつかない。⁷

ここで論じられている「ワンちゃん」は、「愛すべき」側面を持つ人物であるだけにとどま

6 正田雅昭「政治と読むこと或いは人物に寄り添うということ——楊逸『ワンちゃん』をめぐって」『立教大学日文学研究所年報』9号、2012年、59頁。

7 同上。64、67頁。

らず、ときには差別構造をそのまま内面化して、保守的で打算的なむしろ「憎むべき」一面を持つ人物である。確かに、これは従来の先行論で築かれてきた「ワンちゃん」像を転覆した読み方である。しかし、例えば「少なくともこの女性たちを斡旋した秋姉やワンちゃんたちにとって、女性たちがこうした社会的な格差から抜け出す唯一の手段として、表層的な女性性のみが重視されていることは間違いない」⁸のような、国際見合い結婚という非対称的な男女関係のなかでは、女性が性的な対象として見られるというあからさまな差別的視線を、直ぐさま「ワンちゃん」あるいは「秋姉」の個人的な価値観に還元するという論じ方はいささか性急ではないか。また「ワンちゃんの視線は、限りなく顧客である日本人の田舎の男性に近い位置にある」⁹という指摘も腑に落ちない。「限りなく」近いとはいえ、同化することは決してありえない。なぜならば、この小説の中で、「ワンちゃん」は「表層的な女性性」を男性たちと一緒に眺めると同時に、男性たちが見ようもしない、知ることができない、ステレオタイプ化された女性性の裏に隠されたそれぞれに異なる人生の物語も見ているからである。つまり、「ワンちゃん」は性差のヒエラルキーによって構造化された女性像とは違う側面を同時に見るという視線を保っているといえる。この視線はのちに展開されていく、矛盾する「ワンちゃん」の行動に伏線を敷くしかけでもある。

また、正田は国際見合い結婚に関与している「ワンちゃん」の行動に対して、「そもそも今回の日本への逃走に関して、国籍こそ違えど「男」を使って逃走したことは同じであるという事実には気がつかない」というように手厳しい批評を下している。お見合いという出会いの形を通じて外国へ嫁いでいく女性たちの打算的な欲望に言及し、そのような結婚が成立する前提として、「恋愛＝結婚システムから疎外され、その見合いの相手を国外で探さざるを得ないという点においてもまた同様である」と論じている。そうした正田の見解の裏には「恋愛＝結婚システム」が望ましく正しい結婚であるという近代型恋愛結婚イデオロギーの観念が働いていないだろうか。アジアの国際結婚については、次のような視点が提示されている。

アジアの国際結婚は、当人どうしの自然な出会いより、結婚仲介業者や知人のネットワークによる紹介というかたちをとることが多い。数日から1週間の訪問で見合いから結婚式まで終えてしまう方法も一般的である。ほとんど付き合う時間もなく、金銭の授受を伴うので、女性たちを貧困や家父長制の「犠牲者」とする批判的な見方が強かった。しかしそもそもアジアでは、紹介や見合いによる結婚や結婚に際しての持参金や婚資の授受は、ふつうの結婚でも珍しくない。恋愛結婚が唯一の正当な結婚のしかただとする西洋の価値観で評価してはいけないと、パルリウラとウベロイは警鐘を鳴らす (Palriwala and Uberoi 2008: 33, 35)。¹⁰

8 同上。

9 同上。

10 落合恵美子ら編『アジア女性と親密性の労働』落合恵美子「序章 親密性の労働とアジア女性の構築」京都大学学術出版会、2012年、22～23頁。

国際結婚が選ばれる理由は、ロマンチックな「愛」ではなく、むしろ親や本人による人生戦略のためである。これらの戦略を経済的利益だけを目指すものとして否定することはできない。国際見合い結婚における経済的な内実は、国籍が同一の男女の間でも十分考えるからである。小説に戻れば、物語では「ワンちゃん」が中国にいた頃の恋愛・結婚のプロットが挿入されている。「2人の愛はこの万里長城と同じように、どんなに寒い寒風でも壊されることはないぞ。(中略) 真剣かつ神聖な瞬間であった」¹¹というように、「ワンちゃん」の回想において前夫とのほろ苦い思い出が頻繁に語られている。つまり、「ワンちゃん」は恋愛結婚を経験したことがあり、それに失敗している。日本にやってきて、ろくに交流することもできない日本人男性と夫婦になることを選択したワンちゃんは、かつての経験と学びで「恋愛＝結婚システム」を放棄したわけである。「ワンちゃん」の人生の物語は、恋愛・結婚イデオロギーが必ずしも円満な結婚を保証するわけではない、というアンチ・テーゼを示しているのではないか。「恋愛＝結婚システム」という理念を持ち出して、『ワンちゃん』が描いた国際見合い結婚の是非を論じるのは一面的だといえよう。

正田の『ワンちゃん』論は、この小説を、ヒロインのバイタリティーを単純に称揚する読みのパターンから外して読み直した作業であり、確かに新しい視点を示した。だが、それはある種の加害者像を提出する結果を招いていると思われる。つまり、正田は「ワンちゃん」の「愛すべき」側面の反対に、差別構造を内面化した「憎むべき」側面をもつ「ワンちゃん」の形象を指摘したが、それは「ワンちゃん」像を裏返しただけで、多様で重層的な「ワンちゃん」像を提示することにはなっていない。以上を踏まえ、本稿では、これまでの日本の批評家による「ワンちゃん」への同情や共感への正田の批判を受け止めつつ、正田が提示した加害者像とも異なる「ワンちゃん」像を提示したい。まず、小説に描かれている「ワンちゃん」の他の中国人女性に対する共感性の欠如と格差に対する無自覚な振る舞いを、「ワンちゃん」自身やまた「国際見合い結婚」の問題を離れて、ある日本人主婦の在日外国人女性に対する視線が描かれた、鹿島田真希の「女の庭」と比較して読んでみたい。とりわけ、この小説に挿入されている「外国人・女性」の機能に注目したい。「女の庭」は、視点人物である「私」の感情の流れと隣に引越してきた外国人女性を見つめる「私」の視線を常に対置している。それにより、異質さを際立たせる差異化の視線がある一方で、外国人女性に対する「私」の共感もはっきり組み込まれている。ただし、その「共感」は「決して高尚なことではない」¹²という「私」の自認も語られている。共感は同一化ではなく、さらなる差異の可視化へと繋がっている。本論では、こうした「女の庭」に描かれている不合理な「私」の「視線」と「共感」のあり方を經由して「ワンちゃん」を読み解く。その上で「ワンちゃん」の相反する行動や矛盾したように思

11 楊逸『ワンちゃん』文藝春秋、2008年、25頁。

12 鹿島田真希『女の庭』河出書房新社、2009年、23頁。

われる感情の流れを、内藤千珠子が提示した「誰もを拘束する普遍性」¹³をめぐる問題として論じ直したい。

3. 外国人・女性——「共感」するということ

「女の庭」では、「普通の主婦」である「私」が、「子供がいない」ということで他の主婦と区別されて、差異に苦しんでいることが告白されている。語り手は、自分のアイデンティティーに対して「別に私には特別なところはない。自分はいい意味でも悪い意味でも、普通の主婦だ」¹⁴と語りつつ、一方で「私が子供のいる主婦たちと微妙な不協和音を奏でていること」¹⁵、つまり普通ではない存在であることに気づいている。「女の庭」はこのような矛盾した「私」の感情を物語の基調とする作品である。そして、物語は主婦たちが住むマンションにナオミという外国人女性が引っ越してくることによって動き始める。

どうやら新参者は私たちの隣に引越してくるようだ。そこで私はよけいに興味深くなる。きっと変わり者に間違いないと思う。(中略) タクシーが我らのマンションに着いた。私は遠目にタクシーを降りる人物を見る。髪はブロンド。スカートの下から見える引き締まった足。やがてサングラスを取る。やはり外国人だ。(中略) でも隣に引っ越してきた外国人はぎこちないどころではない。とにかくなにもかもが違うのだ。(中略) 多分ナオミはまだ知らないだろう。外国人がどういう孤独な目にあうということ。¹⁶

主婦たちの日常に変化をもたらすのは、ナオミという名前の外国人女性である。仏滅の日に引っ越して来るとするのは、「私」の常識から見ると「きっと変わり者に違いない」のである。「変わり者」の正体が「外国人だ」と判明した瞬間、「私」は自分の憶測に辻褄を合わせた。それ以降、「私」の変哲もない生活が一変して、「私」はナオミをひたすら観察し続けている。そういったような「私」のまなざしは、決して善意的であるとは言えない。たとえば、玄関を掃くナオミの行為に対して、日本人ではないくせに日本人の真似をすると違和感を覚える。また、狭い部屋なのに洒落た西洋風の家具を置いたりして、メイドまで雇うというナオミの異質さに溢れる暮らしぶりに首を傾げて嫌味な視線を注ぐ。だが、この小説において、「外国人・女性」に対する「私」の語りは苛立ちだけで完結はしていない。何もかも違うナオミに共感する「私」の感情もしっかりと組み込まれている。

私は想像してみる。祖国を離れる哀しみを。しかし私には想像もつかない。祖国を離れるなんて、きっと大きな理由があるのだ。暗い過去があったのではないだろうか。そうでな

13 内藤千珠子「主婦の憂鬱が満ちるとき——鹿島田真希『ゼロの王国』から『女の庭』へ」『小説の恋愛感觸』みすず書房、2010年、201頁。

14 鹿島田真希『女の庭』河出書房新社、2009年、7頁。

15 同書、9頁。

16 同書、17、20頁。

ければ、なぜ愛する人たちを置いて、こんな東の果てにきてしまったのだろう。(中略)これから私は、ナオミの哀しみを自分のことのように思うだろう。それは決して高尚なことではない。私はマリカのことでも自分のことのように思う時があるのだから。きっと主婦という人種はどんな境遇の人とでも共感できるのではないかと私は思う。それがたとえ外国人でも。¹⁷

なぜ違って見えても共感することが可能になるのか。内藤千珠子は、「それは故郷を離れ、外国人として暮らすことを選択したナオミと、独身時代と別れ、結婚生活を選んだ主婦である私が同じように人生における選択と変化を経た上で、「繰り返し自身が有名でも特別でもないことに」気づくという体験を重ねてきたからである」¹⁸と論じる。そして、その感覚は「決して高尚なことではない」という「私」の自認にも着目しなければならない。ナオミが立たされている「普通ではない」場所に、「私」は決して入ることができない。社会的、歴史的な差異によって形成されてきた境界線を、「私」は容易には乗り越えることができないからである。語り手は「私」と「ナオミ」の差異を誰の目にも明らかである図式には直ちに還元せず、ナオミの異質さをただ眺めるだけではなく、それについて想像し、擬似体験する「私」の感覚をも見せている。そして、その感覚は最終的に自身の現実へと帰着する。

私がこのマンションで、自国にいと感じられるのは、昼の間だけだ。夫が帰ってくると、この部屋は夫の領土になってしまう。それは大変よそよそしいものだ。だけど私は哀しまない。だけどこの部屋が夫の国になった時の、痺れるような緊張感は一切なんなんだろう。私はそれに恐怖すら感じているのではないか。もちろん私は努力している。夫の国の住人であるように。外国語を覚えるように、それは少しずつ上手くなる。しかしいつまでも緊張感がとれることはない。どんなに外国語を自由に操れるようになっても、この緊張感は失われることはないだろう。¹⁹

「女の庭」における外国人・女性というプロットの機能を構造的に考えてみると、このプロットの挿入によって小説の中に次のような二つの視点が対置されているのがわかる。一つ目は、主婦のあり方は様々であるはずなのに、子供がいけないという理由だけで息がつまるほどの疎外感を感じてしまう「私」に対するものである。二つ目は、外国人・女性の人生の物語は多様であるはずなのに、それらが平準化されてただ「異質」な存在として見なされてしまうナオミ、ナオミのアジア人のメイドに対するものである。「女の庭」において、対置されている二つの視点は、交じわることなく平行しており、互いの問題を相対的に思考する契機は保留されている。そのことによって、従来の「外国人」を見る、考える枠組み——可視化されてきた国同士の経済的格差——とは異なる視点が浮上してきたように思われる。また、外国人女性であ

¹⁷ 同書、22～23頁。

¹⁸ 内藤千珠子「情熱的な憂鬱——鹿島田真希の全文を読む」『文藝』冬号、2012年、67頁。

¹⁹ 鹿島田真希『女の庭』河出書房新社、2009年、39、41頁。

るナオミに対する「私」の「共感」のあり方は、境界を曖昧にすることなく共感してしまうという矛盾した「私」の視線を通して表現されている。そして、その視線は最終的に自身の現実へと帰着する。「私がこのマンションで、自国にいると感じられるのは、昼の間だけだ。夫が帰ってくると、この部屋は夫の領土になってしまう」²⁰という「私」の独白は、まさに他者の問題を自分自身をも巻き込んだ形としてもう一度語り直したものである。そのことによって、「共感」という感覚が「私」とナオミの差異とともに共存するのである。内藤千珠子は、この「共感」のあり方を支えるより深い解釈を提示している。

テキストに設定された矛盾から構造的に思考してみると、スタンダードな普通という観念を作り出す世界の仕組みの、どの地点から見たとしても、私が語る矛盾は、逆説的に、誰もを拘束するある種の普遍性を帯びていることがわかる。ジェンダーのレベルだけではなく、民族や人種、セクシュアリティ、階級、地域、年齢といった種々の次元で、普遍性をめぐる神話は繰り返して生産され、補強されてきた。現実的にはあらゆる意味で普通であることなど不可能なのに、理念の上では普通であることの価値が信仰される。²¹

なるほど、「私とナオミ、にているけど、それぞれの他者として」²²というように、「私」とナオミの接触と共感とは差異から始まり、差異へと終わっていく。つまり「誰もを拘束するある種の普遍性」という観念こそが、「私」そしてナオミに圧迫感を与えつつ、共感できることを約束したといえる。「女の庭」は、こうした差異が保留されたまま開かれている「共感」のあり方を我々に見せてくれる。

4. 孤立を拾い上げて、「ワンちゃん」に向かう

4・1 奇妙な能動性

「女の庭」を経由して得られた、外国人・女性を眺める視線と差異が保留されたままの「共感」のあり方を生かして、再び『ワンちゃん』を読むことに向かってみよう。テキストの中で、「ワンちゃん」には挫けるたびに、すぐさま立ち直って次の行動へ走っていくという奇妙な能動性が読み取れる。前夫と離婚し、何もかも失って無一文になった「ワンちゃん」は、「良いさ、そんなものは2、3年頑張ればどうにかなる。何よりこれで人生を取り戻したのだから」²³と決意し、服の卸売りの経営を始める。そこで、前夫の出現によって、「一気に絶望の淵に落とされてしまった」²⁴。その後工場を畳んで「広州へ行こう、中国の南端にある遠い広州

20 同書。

21 内藤千珠子「主婦の憂鬱が満ちるとき——鹿島田真希『ゼロの王国』から『女の庭』へ」『小説の恋愛感觸』みすず書房、2010年、201頁。

22 鹿島田真希『女の庭』河出書房新社、2009年、84頁。

23 楊逸『ワンちゃん』文藝春秋、2008年、35頁。

24 同書、38頁。

へ行って人生をやり直そう』²⁵と気持ちを切り替えて、広州で洋服のデザイナーに変身する。しかし一年後、幼い息子を連れた前夫に再び見つかってしまう。「一年間も楽しんで築いた夢が一瞬にして泡と化して弾けてしまった。(中略) 眠れないワンちゃんは思った、外国しかない、そうだどこか外国へ行くしかないんだ」²⁶。国際見合い結婚に踏み込む前に「ワンちゃん」が経験した人生のドラマは、このような奇妙な能動性ととも小説に配置されている。語り手は、執拗に「ワンちゃん」を何かではない者として語っている。

「ワンちゃん」はひたすら前夫による精神的・経済的な搾取から「逃避行」を続ける。「逃避行」は、何かを拒否してそこから脱出したいという欲望によって支えられている。「ワンちゃん」は、何を拒否しているのだろうか。今までの先行論で論じられているように、「前夫」なのだろうか。

「これじゃ足りないなあ、まあ、取りあえずホテルを決めちゃうから、明日またゆっくり」
そう言って、息子の手を引っ張って出て行行った。周りにいた同僚がパッとワンちゃんを囲むように集まった。

「あれ、前の旦那？ ハンサムな顔をしているけどね」

「復縁するの？ まあ子供もいるしさ」

「なんで離婚したの？」

ワンちゃんが凍りついたように椅子にぐったり倒れこんでいるにも拘らず、質問が電のよう次々と頭に降り注いだ。²⁷

このシーンは、「ワンちゃん」が外国に行く前に、最後に元夫に遭遇した場面である。ここで、「ワンちゃん」を見つめる周囲の目線が初めて描かれるようになる。この場面からわかるのは、「ワンちゃん」は前夫を拒否しているが、彼女にとってより耐え難いのは、紛れもなく世間の目線そのものであるということだ。より正確に言えば、ハンサムな夫と幼い息子を手放した自分の選択が、周囲の人から見れば「普通ではない」と判断されることが、「ワンちゃん」は耐え難いのである。それだけではなく、「お前って本当に苦勞が多いね、ごめんね、もっと良い名前をつけてやれば、ごめんね……」²⁸、「赤い色は厄除けになるんだから。ずっとお前が哀れだったけど、せめてこれからは……」²⁹というように、母親も含めて、彼女は周囲から常に「不幸」＝「普通ではない」存在として見られている。つまり、この小説の中で「ワンちゃん」は「普通」から疎外された存在とされており、それゆえ「ワンちゃん」は、「普通ではない」ものではないように、執拗に行動し続けているのである。とすれば、奇妙な能動性というのは、彼女自身の「強さ」あるいはバイタリティーに単純に還元することはできない。そうで

²⁵ 同書、39頁。

²⁶ 同書、40頁。

²⁷ 同書、40頁。

²⁸ 同書、7頁。

²⁹ 同書、10頁。

はなく、奇妙な能動性は、「ワンちゃん」が自らに与えられた「普通ではない」存在という位置付けを拒否し、そうではない者として執拗に行動し、語り続けていく際に生じたものとしてテキストに配置されているものである。

4・2 「孤立無縁」のワンちゃん像に向けて

しかし、忘れるわけにはいかないのは、これが「小説」であるということだ。「小説」にしかできないこととしての、ワンちゃんの「語り」に注目してみよう。『ワンちゃん』は第三人称の作品であり、小説の中には「ワンちゃん」の「語り」と「ワンちゃん」を見つめる語り手の「語り」が存在する。語り手は極めて「ワンちゃん」に近い場所にいながらも同一化するのではなく、むしろ次のようにテキストの語り手が現実の情報を補完するなど、読者とのつながりを求めていると考えられる。

- ①縫製工場をやめて、洋服の露店を出したのは彼女が18歳の時のことだった。ちょうど「改革解放」の風が吹き始め、さすがに長年灰色を背負ってきたことに参っていた中国人なだけに、誰もが人一倍早く人民服を脱ぎ捨て、香港や台湾からの「奇装異服」を狂ったように求める時代であった。(9頁)
- ②「あの人」とはワンちゃんの前の夫だ。当時「晩婚晩育」を唱えていた中国で、女が19歳、男が21歳での結婚は周囲から白い目で見られたのも意外ではなかった。仕方がないことだ。——いわゆるできちゃった婚なのである。(26頁)
- ③前世紀の80年代の後半から90年代の初めにかけて、中国では洋服の露店が急に増え始め、ファッション業界も飛躍的な発展を遂げた。ちょうどワンちゃんが商売をして4、5年の頃であった。町中で人民服の灰色を次第に見かけなくなって、いつしか新ファッションの鮮やかさに一変した。……かつて批判されていた鄧小平の「黒猫でも白猫でも、ネズミさえ捕まえば良い猫だ」というスローガンが茶の間に流行し、誰もが金という「ネズミ」を捕まえる猫になろうとして、「下海」(商売人になる)ブームを引き起こした。(36頁)

中国の改革解放などの社会的、歴史的背景は明らかに日本人読者向けの情報として描かれている。現実の情報で読みを補助し、語り手を經由して現実の作家とつながることが要請されていると言って良いだろう。これに呼応したかのような読みも現れている。たとえば、「この物語を支えている原理は、常に差異≒格差である。(中略)中国と日本の経済的差異≒格差を背景に中国の女性は日本に嫁ごうとしているのだ」³⁰というのは、語り手が示した情報を共有した上で示された見解であろう。また、バイタリティーに富む「ワンちゃん」の人物造形について、「楊逸さん自身もそうだけど、中国の女性って強いよね。(中略)日本人の場合は長い伝統

³⁰ 正田雅昭「政治と読むこと或いは人物に寄り添うということ——楊逸『ワンちゃん』をめぐって」『立教大学日本学研究所年報』9号、2012年、61頁。

の中で女性は弱さ、非力さから出発しているから³¹というように、「ワンちゃん」の「強さ」を現実にある日中の女性の差異の中で読むというような言説もある。いずれも一読者の立場から、語り手との間にある歴史的、社会的に生じた亀裂を明確にしながら、『ワンちゃん』というテキストを、その亀裂が意味する価値をめぐるせめぎ合いの場として受け取るというようなものであると考えられる。しかし、それは小説によって提供された一般的な情報を「ワンちゃん」に当てはめて、「ワンちゃん」を中国人女性一般の象徴として読むことでもある。有り体に言えば、安易な共感を示したり、あるいはスタンダードな理念を用いて批判を行ったりする議論である。留意しなければならないのは、「ワンちゃん」はテキストにおいて、時々これまでの現実の読者たちが望む、社会的意味からずれた存在として描かれているという点である。言ってみれば、現実世界と「ワンちゃん」が接触する地点には、目に見えにくい亀裂があるということだ。

小説に登場する他の人物に向けられる「ワンちゃん」の視線は、誰に対しても一方通行的な同情として描かれており、読み手にとって、ある種の読みにくさ=共感しえないものとなっている。

土村は李芳芳が呉菊花かで迷っていたが、ワンちゃんは懸命に呉菊花を薦めた。何故だろう、迷信を信じるわけではないが、万が一李芳芳が“克夫命”³²だという噂が本当だったら……、ワンちゃんはもうそれ以上考えたくない。でも幸いなことに、宇野は李芳芳が良いと申し出た。ワンちゃんはホッとした。李芳芳と孫領弟のストーリーを聞いたとき、彼女たちのために必ず日本で相手を見つけてあげるとワンちゃんは内心そっと決めていた。この二人を今の環境に放っておくと、世間の噂に殺されていくのが目に見えているからだ。³³

「ワンちゃん」は一方で他の中国人女性に対して強い同情を寄せながらも、そして「克夫命」が迷信だと理性で分かっている、やはり李芳芳が土村の結婚相手になってほしくないという気持ちを吐露している。そして「お見合いツアー」を「売春ツアー」だと認識する宇野という人物を、李芳芳に薦める。李芳芳などの他の中国人女性を「今の環境」から脱出させたいと強く願う「ワンちゃん」であるが、猥らな本性を持つ宇野と結婚するようにと、李芳芳を導いていく。こうした矛盾を見れば、「ワンちゃん」の救出願望は確かに都合主義的なものに過ぎない。しかし、角度を変えて見れば、封建的な意識がまだ濃厚に残っている辺鄙な田舎で苦しめられている他の中国人女性への同情、そして宇野のような女性を性的対象としか見ない日本人男性への嫌悪、さらに幾度かの接触を通じてやがて生まれてきた土村に対しての恋心というような、いくつもの欲望が同時に重層的に存在しており、その複数性と非均質性が良い「ワンちゃん」ではなく、リアルな「ワンちゃん」を形作っているといえないだろうか。語り手は

31 高樹のぶ子×楊逸「対談・国境を越えたから書けたこと」『文學界』9月号、2008年、223頁。

32 「克夫命」は、夫の運を悪くする妻。さげまん。物語の中で、李は亡き夫と同時に交通事故に遭ったが、自分だけ一命をとりとめたということが原因で、村の人々から「克夫」の運命を持つ女だと噂されている。

33 楊逸『ワンちゃん』文藝春秋、2008年、61頁。

「ワンちゃん」に身を寄せながら、彼女の限界も隠さずに見せている。その意味からいうと、「ワンちゃん」の視線はテキストの語り手と、語り手が提供した現実の情報を共有する読み手のどちら側からもずれているのである。「ワンちゃん」は、語り手に近づく読者たちが望む社会的意味からずれた存在として、「孤立無縁」な場所で奇妙な能動性を発揮し続ける。

自分は昔と少しも変わっていない。ずっとこんな風に町をぶらぶらしている。中国語では「漂泊」というが、日本語の「浪人」に似ている。初めて日本でこの言葉を目にした時、胸がドキッとした。日本語の意味はどうであろうと、波に任せて生きている自分の人生を反映するにはピッタリの二文字である。昔も今も、中国にいようと日本にいようと、虚ろな目をして目的もなく町をぶらぶらしている。仕入先の広州に行っても、前夫の浮気現場を目撃した時も、離婚して店を全部畳み、倉庫に籠った時も、そして日本に嫁いでからの日々……。踏んでいる町こそ様々であるものの、他に代わるものはあるのだろうか、虚ろな目。空っぽな頭。孤立無援な気持ち。麻痺した神経。いつかこのままぶらぶらして、どこか闇に消えていってしまうような、と、そんな場面が何度となく頭に過ぎる。³⁴

『ワンちゃん』という小説が持つ「読みにくさ」は、単に書き手による文体や表現の技巧の問題だけではなく、「ワンちゃん」の語りの中にもしっかり組み込まれている。いかなる苦境に陥っても決して挫けないという奇妙な能動性、また小説に登場する他の中国人女性に対する矛盾した同情は、どれも理不尽な理屈のように、ある種の読みにくさとして理解することができる。そして、読みにくさこそが小説に仕掛けられた重要な問題提起にほかならない。「ワンちゃん」は、語り手が提供した、現実の読者との間にある歴史的・社会的に生まれてきた差異やスタンダードな価値観を明確にしなからでなければ、語れないように仕掛けられている。しかし、「ワンちゃん」自身はそうした「普通」からずれた存在なのである。彼女の語りには、日本人の読者と語り手である中国人の書き手の、どちらのカテゴリーに向けても、徹底して安易な共感や読解を排するものを孕み得る。そのものが、ほかではなく物語内の現実としての「ワンちゃん」の「孤独」を生んでいる。

以上の引用に戻れば、「波に任せて生きている自分の人生」、「いつかこのままぶらぶらして、どこか闇に消えていってしまう」という描写から、目の前にある様々なカテゴリーとのつながりが逐次失われていき、ただ「孤立無援」である「ワンちゃん」像が浮かび上がる。ここでの「ワンちゃん」の孤独をどう捉えればよいのか。従来の「寄り添う」論であれば、不安定な生活に強いられて「虚ろな目をして目的もなく町をぶらぶらしている」という「ワンちゃん」の告白は在日中国人女性一般の困難として、むしろ共感を呼び込みやすい語りとされるだろう。だが、先ほどに論じたように、「ワンちゃん」は、複数性を含んだ非均質な欲望を持つ、ずれた存在なのである。一見すると共感を呼び込みやすい語りに見えてくる亀裂は『ワンちゃん』というテキストの中で消えることはない。「孤立無援」なあり様は、人生のそれぞれの節目に

³⁴ 同書、29頁。

次々と、「ワンちゃん」のアイデンティティーを形作るはずの情景が現れてはその度に崩されていくこととして描かれている。何にも同一化し得ない場所で生きる者である「ワンちゃん」は、共感することにもされることにも抵抗し、容易に読まれてしまうのを拒否していると捉えうるだろう。

5. おわりに

本稿では、『ワンちゃん』という小説をめぐる、これまでの日本の批評家による同情や共感を示す議論に加勢せず、「ワンちゃん」の語り注目してそこに生じる「孤独」を拾い上げることで、ネガティブとして出された加害者としての「ワンちゃん」像からも脱することを試みた。「ワンちゃん」は矛盾している、非均質的な者でありながら、矛盾していないように語ることを、普遍性をめぐる観念の下で要請されている。しかし、「孤独無援」なあり様には、どのカテゴリーに向けても徹底して安易な共感や読解を排するという姿勢を見ることが出来る。「女の庭」に描かれている「私」のナオミに対する、多層性と複雑性が保留されたままの、開かれている「共感」に比較すれば、何にも同一化し得ない場所に立ち尽くしたままの「ワンちゃん」に対する語り手の視線は、まさに閉ざされている「共感」のあり方を示している。しかし同時に、これは小説であり、聞き手がいなければ語り手にはなれない³⁵。「ワンちゃん」はより抽象的な次元でひたすら聞き手を求めている。その瞬間がこの小説の中で確保されている。

結婚するまで、旦那との間には言葉もなくフィーリングの一致もなく、ただただ地元から離れたいという思いの一点張りで、ことが猛スピードで進んだ。そのプロセスからは何故かチャップリンの映画を連想してしまう。中学時代に見たサイレント映画の1シーンに、今の自分が重なって見えた。滑稽なストーリーが無言で演繹されていく中で、黒い帽子をかぶっているチャップリンの顔がふっと自分の顔になっているように見えてしまう幻想を度々抱いた。³⁶

ここでは、国際見合い結婚という出来事が戯画化されて表現されている。ワンちゃんは初めて自身のことを相対化して見せている。チャップリンの作品の含意を引き合いに出しながら、この比喩を構造的に思考してみよう。自分の選びとった国際見合い結婚のプロセスを「普通」から逸脱している「滑稽なストーリー」とみなし、己をチャップリン=人に笑われるキャラクターに喩える。だが、そのコミカルな現象の裏には、逆説的に、常識や正論に武装された理念上の「普通」を嘲笑する力もあるはずである。それは、このテキストに登場する、国際見合い

³⁵ 「語り手の聞き手を求める行為」の議論について、飯田祐子「聞き手に向かう——書くことと読まれること」とフェミニズム、『私小説 from left to right』を通して『岩波講座・文学 別巻』岩波書店、2004年、231～232頁を参照した。

³⁶ 楊逸『ワンちゃん』文藝春秋、2008年、40～41頁。

結婚に関与する一人一人の人物のドラマを「不幸」＝「普通ではない」と決めつける「普遍性」を「拒否」している。このように、『ワンちゃん』は、読み手と繋がろうとする小説である一方で、同時に安易に「共感」されることへの拒否をも書き出したのである。そして孤独無縁な「ワンちゃん」像そのことを可視化する作品である。

キーワード：中国人作家、越境文学、ジェンダー

Abstract

Crossing the Border and Narrating the “Loneliness”:
With Yang Yi’s *Wan Chan* as Example

Chen Chen

Yang Yi, a Chinese writes in Japanese, was among the seven nominees for this winter’s Akutagawa Prize. *Wan Chan* is her most famous work published on Bungakai in 2007. At present there are mainly two perspectives to interpret this novel. One is to regard it as Cross-border literature, with its focus on expressions and literary techniques in Japanese. The other is to focus more on Wan Chan, the female protagonist of the novel and the sympathy for her destiny of marrying to rural Japan. In this paper, the author believes this work is endowed with a positive meaning when putting into a context of Cross-border literature, even though the issue of unequal “International Marriage” is apparently neglected. However, the theme of this novel is not a criticism on “International Marriage” or gender/racial discrimination. Thus, the author tries to abandon two perspectives above and re-interpret this novel and protagonist by comparing to works of Kashimada maki’s *Onna no niwa*.

Keywords: Chinese writer, Cross-border literature, Gender